

『協働学習で学ぶスピーチ』

活動のヒント集

(教師用参考資料)

渋谷実希，勝又恵理子，古谷知子，前川志津，森幸穂 [著]



もくじ

教えて、パンダ先生！	3
------------	---

特長	6
----	---

使い方	7
-----	---

Part 2

Chapter 1. スウジコショウカイ [テーマ：自分のオリジナリティ]	9
---------------------------------------	---

相互評価シート Chapter 1.	18
--------------------	----

Chapter 2. 食べたいなあ～、あのお昼ご飯 [テーマ：説明力・伝える力]	19
--	----

相互評価シート Chapter 2.	27
--------------------	----

Chapter 3. しくじった！ 失敗から学ぶ教訓 [テーマ：伝える力・内容の価値]	28
---	----

相互評価シート Chapter 3.	40
--------------------	----

Chapter 4. ほりほり情報探索！ [テーマ：内容の深化・語彙力]	41
--------------------------------------	----

相互評価シート Chapter 4.	51
--------------------	----

Chapter 5. 愛されるつっこみ 質疑応答 [テーマ：質疑応答の力]	52
---------------------------------------	----

相互評価シート Chapter 5.	59
--------------------	----

Chapter 6. 責任を持って自慢しちゃいます！ [テーマ：責任を伴った発信力]	60
--	----

相互評価シート Chapter 6.	70
--------------------	----



教えて、パンダ先生！

Q1

どうして「協働学習」なんですか。

A

経験から、効果があることを実感しているためです。

我々は、口頭表現やスピーチの指導にあたり、「協働学習」を意識して行ってきました。学生が互いに情報を提供し合い、仲間の成長に責任を持つことにより、各自が自分の学びを達成していく姿を見てきました。

特に「スピーチで何を話すか」を考える過程では、適度に緊張がほぐれることが有効だと感じています。学生どうしで話すことで、アイデアが出やすくなり、話しているうちに考えがまとまっていく様子が見られるからです。さらにモチベーションへの大きな刺激となるのが、スピーチに対するクラスメートからの評価です。コメントを読む目は真剣そのもので、教師からの評価とは別の効果があることがわかります。

このように、「協働学習」のさまざまな長所を感じてはいますが、同時に難しさも痛感してきました。そのようなときは、教師どうしの「協働」によって、さまざまな突破口やアイデアを得ました。「協働」できる仲間を持つことは、教師にとっても大切だと実感しています。より学術的に詳しく知りたい方は、以下の参考文献などをご参照ください。

●「協働学習」の参考文献

池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために—』 ひつじ書房

石黒圭・胡方方・志賀玲子・田中啓行・布施悠子・楊秀娥 (2018) 『どうすれば協働学習がうまくいくか—失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学—』 ココ出版

志賀玲子 (2017) 「協働学習の可能性—異文化間教育の視点より—」 『一橋大学国際教育センター紀要』 8, pp.15-26

津田ひろみ (2015) 「協働学習の成功と失敗を分けるもの」 『リメディアル教育研究』 第10巻第2号, pp.143-151

津田ひろみ (2016) 「大学授業における協働学習の効果の検証—自律的な学習者の育成をめざして—」 『明治大学教職課程年報』 第38号, pp.133-143

藤田朋世・フランプト順美 (2009) 「ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み—重慶大学での実践報告—」 『日本語教育論集—世界の日本語教育—』 19, pp.199-213, 国際交流基金

Q2

協働作業が進まない、協力体制がとれないクラス／グループにはどう対応しますか？

A

早いうちに学生どうしの信頼関係を築かせるのがカギです！

スピーチが苦手だったり、人見知りが激しい学生の多いクラスでは、特に早い段階でお互いの信頼関係を築くラポールづくりが必須です。これに時間を割くことで、失敗しても怖くない、言いたいことが言える、話しやすいと思える環境をつくっておきます。すると、後の協働作業がスムーズになるだけでなく、クラスに一体感が生まれ、スピーチの上達が全体的に上がります。

具体的には、固い心と体をほぐすアイスブレイキング・アクティビティを、クラス全員またはグループで行います。机をどかしてストレッチ、輪になってフルーツバスケット、ジェスチャーゲーム、1人ずつ後ろに倒れ、それをグループで支えるトラストフォールなど、体を動かすことがポイントです。学期半ばでも、気分転換にアイスブレイキング・アクティビティを授業のはじめに行うことをおすすめします。子どもっぽいと思うかもしれませんが、これが実に馬鹿にできないプロセスです。教師のみなさんが一番楽しんでやると学生もやる気になります。

この「活動のヒント集」でも、各章にアイスブレイキング・アクティビティの例を載せました。ぜひ活用してみてください。

Q3

教師の役割は何ですか？ 教師はお手本のスピーチをする必要はありますか？

A

教師はファシリテーターです。教師のモデルスピーチは必要ありません。

教師は、授業を進めるファシリテーターであり、学生のアドバイザーです。この本ではスピーチの準備を学生たちが協力し合って進める協働学習で行います。教師は、その活動を行うためのファシリテーターに徹してください。準備の活動もスピーチの発表も、ぜひ学生主体で進めてください。

教師のモデルスピーチは必要ありません。教師がお手本を示すと、学生たちが教師の真似をしようとして、学生のオリジナリティが損なわれてしまうからです。学生たちが気持ちよくオリジナリティを出せるように、教師は今までの経験などを話して、アイデアのヒントを提供してあげるといいでしょう。

Q4

「学習者主体」とはどのようなことでしょうか？

A

学習者が自分の学びに責任を持つことです。

学生どうしがただ楽しくおしゃべりをしたり、目的がわからないままさまようのは「学習者主体」とは言えません。学びの目標が何か、そのために必要なことは何か、やったことの成果があがっているのか、などについて学生が自分で把握しながら進むことが本当の「学習者主体」だと考えます。このテキストではさらに、自分だけの学びではなく、互いの成長についても責任を持つ「協働学習」のスタイルをとっています。相互に助言、指摘し合うことで1人では気づけない発見をし、成長してほしいと願っています。



Q5 アイデアが浮かばない学生への指導はどうしたらいいですか？

A **自分で書き出し、グループでの話し合いの中からアイデアを引き出すようにします。**

まず教師が知るべきは、学生の中には「みんなをビックリさせるような話、人に自慢できるような立派な話、他の人よりもおもしろい話をしなくては！」という気持ちが先行して、初期段階でつまづいている学生がいるということです。このようなタイプの学生は、人より優れた話をして「自分を良く見せたい」という深層心理が働いて、それが自由な発想を妨げていることがあります。まずは、「これはおもしろくない情報だ、平凡なネタだ」という思い込みを取り払い、話題について思いつく情報・ネタをいったんすべて出してみるように伝えてください。そして、話題についての情報、思いついたことは、自由に紙に書かせ、アイデアを見える化させましょう。それをもとに、グループ活動でクラスメートが質問したり、連想する言葉を言い合ううちに、話すべき情報・ネタが浮かび彫りになります。教師は各章の学習目的に沿うような質問をして、グループの話し合いを活性化させてください。

Q6 オリジナリティは必要ですか？

A **必要です！**

日本の子どもたちや大学生の発表を聞くと、みんなが同じ内容をくり返しているように感じます。誰がどんな話をしたのか、印象に残らないのです。よくよくその理由を聞いてみると「目立つのが恥ずかしい」「みんなと違うことを言って変だと思われたくない」という心理があるようです。彼らの気持ちもわからなくはありませんが、これから社会へ、世界へ出ていくときには「自分」を表現し、印象づけていくことが求められるでしょう。その準備のためにも、また自分を確立していくためにも、学生時代からオリジナリティを探っていくことが大切です。

かといって、オリジナリティを大げさにとらえる必要はありません。華々しいことや自慢できるものでなくてもかまいません。一人ひとり育ってきた環境や経験が違うのですから、どんなに小さなことでもすべてがその人だけのオリジナルなはず。このヒント集には、学生のオリジナリティを少しでも引き出すヒントとなる活動がたくさん載っていますので、ぜひ活用してください。

Q7 緊張する学生や自信のない学生へはどう対処したらいいですか？

A **まずはクラスのラポールをつくっておくことがポイントです！**

スピーチの前にアイスブレイキング・アクティビティを十分に行い、クラスの間みんながお互いよく知っている、信頼できると思えるように、ラポールづくりをしておくといいでしょう。また、スピーチの本番前に、ペアやグループ内で何度もスピーチの練習しておきましょう。さらに、「はじめる前に」の活動にあるように、緊張した体験や克服術をペアやクラスで話し合っておくのも効果的です。

Q8 クラスの人数が多い場合はどうしますか？

A **発表を2、3回に分けましょう。**

このテキストでは、基本的に最初の授業で準備、次の授業で発表になっていますが、人数が多い場合は、発表を2～3回に分けるといいでしょう。2～3分のスピーチを30人クラスとする場合、学生が評価シートを書いたり、発表者が入れかわる時間などを考え、発表を2回に分けて1回の授業で15人ずつ発表とすると余裕を持って発表の授業ができます。

Q9 このテキストではビジュアル・エイドは使わないのですか？

A **スピーチに慣れないうちのビジュアル・エイドの使用は、おすすめしません。**

なぜなら、それを作成することに時間をかけすぎてスピーチが疎かになったり、プレゼン用ソフトをシナリオ代わりにして読み上げたり、写真を多用して説明不足になったりするなど、ビジュアル・エイドに頼りすぎてしまうからです。このテキストのPart 2 Chapter 1～Chapter 5においては、ビジュアル・エイドがなくてもよい基本的なスピーチの練習をすることが目的となっています。

Chapter 6では動画やスライドを作成しますが、重要なのは作るまでの過程です。グループで協力しながら、観てもらおう対象者を絞り、情報を吟味し、伝わるように工夫することを目的としています。

ビジュアル・エイドは、あくまでも話の内容を視覚的にわかりやすくするための補助と考えてください。



Q10 留学生のクラスでも使えますか？

A はい、使えます！

仲間との協働を通し、どのような日本語を使えばクラスメートに伝わるのかについて考えたり、新しい表現が増えたりするなど、言語自体を学ぶいい機会にもなります。

教師ができる工夫としては、発表前に一度スクリプトを提出させ、誤用をチェックすること、アクセントやイントネーションなど、音声面で気をつけるべき箇所を注意し、練習させることなどが挙げられます。それにより、正確で聞きやすい発表が可能になります。また、相互評価シートの空欄に「日本語の表現の正確さ」「発音の聞きやすさ」など、留学生用の観点を入れるとよいでしょう。

Q11 テキストの順序通りに進めたほうがいいでしょうか。

A そのほうが扱いやすいと思います。

このテキストは、Part1の基礎知識からPart2の実践編へ、Part2のテーマも個人的な内容から社会とつながりのある内容へ、という順序になっています。ですから、例えば、1学期15週の場合、Part1の3つのテーマを1週ずつで行い、Part2の各章を2週ずつで行うとちょうどよい流れになると思います。巻末資料は、授業前のアイスブレイクに使用したり、話す／聞くときの態度について気になったときに使用するとよいでしょう。しかし、これはあくまでも目安ですので、学生の様子を見てアレンジしてください。

Q12 このテキストの付録1（ペチャクチャ質問集）と付録2（スピーチクラス「発表者・聞き手あるある」）は授業で使えますか？

A はい、とても楽しく使えます！

付録1、付録2とも、授業で使えるとても楽しい付録です。付録1の「ペチャクチャ質問集」は授業のはじめにアイスブレイキング・アクティビティとして使うといいでしょう。「留学生に聞いてみたい質問」も用意しました。留学生が混在するクラスや日本語クラスで活用してみてください。さまざまな質問があるので、授業の内容に沿った質問をするのもひとつの例です。また、学生がクラスメートに聞きたい質問を書くスペースがあるので質問集を増やすことができます。クラスメートとおしゃべりしながらリラックスをすることは発表前の大切なウォーミングアップになります。

付録2のスピーチクラス「発表者・聞き手あるある」は、コースのはじめの頃や、学生の発表後などに使うといいでしょう。発表する際の癖や発表の聞き方の癖をおもしろく書いてあるので、楽しく使えます。

Q13 成績評価は何を基準にしたらいでしょうか？

A 気になる成績評価のしかたをご紹介します。

成績評価のしかたは先生や学校・大学によって違うので、ここでは参考までにご紹介します。

総合成績評価には「絶対評価」と「相対評価」がありますが、発表の評価は学生の苦手意識を少しでもなくすように、絶対評価をおすすめします。少しでも良い成績のほうが学生もうれしく、さらにやる気が出ます。総合成績は、毎回の発表と、発表後に提出する「自己評価シート」、授業への取り組み方などを評価します。

【例】発表(60%) + 自己評価シート(30%) + 出席率や授業中の態度・参加度など(10%) = 総合成績

発表の評価は各章の目的、発表内容の構成、デリバリースキルなどをもとに評価します。例えば以下のような基準です。

【例】

点	評価	発表
100点～90点	A	すべてのポイントが良い発表
89点～80点	B	あと少し〇〇が良くなるという発表
79点～70点	C	いくつかのポイントをもっと良くする必要がある発表
69点～60点	D	練習不足だが、最低限のポイントはできている発表
59点～	F	練習不足で、すべてのポイントができていない発表

特長

● スピーチの指導をしたいけれど……



● スピーチ指導の「困った」を解消したこのヒント集は……



使い方

このヒント集は、『プレゼンテーションの基本 協働学習で学ぶスピーチ ―型にはまるな、異なれ!』を使って授業を進めるための教師用参考資料です。各章、以下の項目が含まれています。

A 各章のねらいと全般的な指導のポイント

B 学習目的・時間管理・形式・準備するもの

- ・ 学習目的：スピーチ準備と発表を通して考えたり、体験したり、身につけてほしいこと
- ・ 時間管理：各章を終えるために必要なコマ数（1回90分の授業を想定）
- ・ 発表形式：1人での個人発表かグループ発表か、および、ビジュアル・エイドや動画などを使用するかどうか
- ・ 準備するもの：授業の前に、あらかじめ用意しておいたほうがよいもの

C 授業の進め方の例と注意点

- ・ 授業の大まかな流れと各作業に要する時間の目安（複数回の授業にわたる章の場合には、1回の授業ごとにわけて提示）
- ・ 各作業の内容と目的
- ・ 各作業の手順と注意点

「相互評価シート」（※このPDFに収録されています）

※テキストにない活動は
オレンジ色の枠で表示

各章の終わりには、スピーチの課題ごとにアレンジされた「相互評価シート」が添付されています。「相互評価シート」は学生がお互いに評価し合うためのシートです。発表者×クラス人数分をコピー、配布してお使いください。（例えば、20名のクラスでそのうち10名が発表する場合、 $10 \times 20 = 200$ 枚をコピーし、学生1人に10枚ずつ配布します。）

「アイスブレイキング・アクティビティ」

このヒント集の各章には、テキストには掲載されていない「アイスブレイキング・アクティビティ」が紹介されています。「アイスブレイキング・アクティビティ」を行うことでクラスの雰囲気や和み、その後のグループワークを主体とした準備や本番の発表を円滑に進めることができます。ぜひ、ご活用ください。

※テキストには記載されていないアイスブレイキング・アクティビティと2週目以降の部分は、オレンジ色で表示されています。

「自己評価シート」(※テキストの別冊)

テキストに「自己評価シート」が付録されていることからおわかりのように、このテキストは、スピーチを準備・発表して終わりではなく、自分の発表を振り返り、自分の問題点を自覚し、改善に取り組みながら練習をくり返すことでスピーチの技術を磨くことを前提として書かれています。ただ漫然と練習をくり返すだけでは、問題点を自覚したうえでの練習ほど改善の効果が得られないからです。クラスメートや教師からのコメントやアドバイスも有効ですが、自身のスピーチを自分の目で見たり耳で聞いたりすることによる改善への効果は絶大です。

記憶に頼るのではなく、ビデオカメラやスマートフォンの録画機能などを駆使して、学生が自分の姿を正確に、客観的に振り返ることができる環境を整えてあげることを強く推奨します。撮影は、教師が行うのが難しいようであれば、クラスの中からその日の撮影係を指名したり、ペアやグループをつくって持ち回りでお互いを撮影するルーティーンを設定したりすると、スムーズに行えます。

学習者が学びを進めていくためには、安心して参加できる教室風土をつくり、学習者どうしの協力体制を築いていくなど、やはり教師が担う役割は大きいものです。そこでこの「活動のヒント集（教師用参考資料）」では、学習者が少しずつ自己開示をして打ち解け合ったり、協力してお互いを引き出し合うための活動の紹介や、学習者が自分で目標を見いだすための工夫など、われわれの経験からヒントになりそうなものを集めて作成しました。そして、初めてスピーチを指導する先生も授業全体がイメージしやすいように、1コマずつ流れに沿って説明してあります。ですがもちろん、このままなぞっていただく必要はありません。目の前の学習者に合わせ、どんどん使いやすいようにアレンジしてください。